# 鎌倉中葉以前に於ける論註研究の一斑

伊藤眞徹

## 一

我が國淨土教各派の等しく正依の論の註疏の最高峰として、尊重する處の鸞師の論註が、何時如何なる人に依て我國に將來せられたるかについては、今日推定するに資料に乏しく、正確を缺くことは誠に遺憾とすべきである。

唯文獻上その存在を知り得らるゝ最古に屬すべき時代としては既に早く智光の在世にその流布の片鱗を知ることが出來るのである。卽ち智光の著往生論疏五卷の現存零文の內容檢討[1]と龍樹曇鸞の芳躅を追慕する念の熾烈であつた等の行業上[2]より之れを決定することが出來る。元來智光が淨土を願生せしことは、その所屬の宗風に依る影響を多分に受けたものであつて、既に凝念は此點を指摘して

日本國元興寺智光法師作二往生論疏五卷一彼取二曇鸞一以爲二義節一曇鸞智光俱是三論（淨全一五、五八五）

と述べ、兩者の關係のみならず、兩師の著述の關係をも明白にしてゐるのである。

以上は之れ論註の我國初期淨土教思想の表面に表はれ、影響を與へた初めであるが、典籍の在存を知る古き記錄としては、正倉院文書天平二十年六月十日の寫章疏目錄中には

往生論私記　卷請留　（大日本古文書三、八七）

とあり、又天平勝寶四年十月二十二日の奉請經論疏目錄正倉院文書には

往生論私記　一卷「婆藪盤豆述」

とある。古來論註の異稱として知られたるものに往生論記、私記、註解、註論等がある。此の天平勝寶四年は智光が般若心經述義一卷を著はせし年に相當し、當時は既に佛教公傳後二百年に達し、惠隱が無量壽經を宮講し③てから百年に及んでゐる。他方支那に於ては鸞師寂後二百十年、道綽を經て善導に至り、正に淨土教の極盛期に入つて既に百餘年を經過した時代である。④かくの如き情勢にあつて既に綽導二祖の著作は、我が國に流傳し轉寫せられたるを以て、此等二祖の教義信仰の源泉礎底をなし、殊に當時奈良佛教を代表すべき三論に關係ある鸞師の著作も、綽導二祖のそれと殆んど同時に將來せられたりと推定するも、敢て當を失したるものではなからう。

史籍に傳ふる所に依れば、惠隱の大經宮講以後智光に至る間の淨土教信仰は、杳として消息を絕つのであるが、今その原因について考察するに、元來古京の六宗は學解佛教とも云ふべく、特に奈良朝の前半期は三論法相時代とも云はれ、宗教としてよりも哲學として、民衆よりも僧侶と云ふ特殊階級にその面目を維持してゐたのである。此の事を傍證するものとしては、當時の寫經所に於ける經論章疏筆寫目錄がある、之れを一々詳細に檢すれば、自ら此の間の事情は首肯し得られるのである。かくの如く此の時代の佛教が學解の一面にのみ偏せしことは、自己の心靈の救濟を求むる信仰佛教、悟道佛教發展の素地稀薄なりしことを物語るものである。されど奈良佛教の底流として、一部の篤信者間に潛行的に尊信せられた、所謂素朴西方願生思想は、法相三論兩宗中に於いては、寧ろ三論を溫床として多く

の仰信者を出し、漸次發展流通したのであつて、之れ偏へにその宗風に由來するものである。

此の西方願生思想は逐次年と共に發展の過程を辿れるならんも、而も關係典籍の文獻に表はれることの少く、鸞經目錄にその名を留めない原因は、根本に遡つて寫經の目的を究明せなければならない。元來寫經は公立の寫經所に於て各專門の技術家に依り準備を調へ、寫經師に依つて書寫せられたのであるが、他面必要と供養の爲めに私的の寫經事業も發願せられたことであらう。此の私的の寫經事業の目的は概括して二途とせられるであらう、卽ち、一は法寶尊重恭敬の爲めであり、他は學習研究の資料の爲めとである。更に前者の中には令法久住の精神と又書寫の功德に依り先亡者の離苦得樂と現存者の現世安穩後生善處の祈願心とを認め得られるのである。又後者に於ては純學習的のものと祕傳書的性質を含めるものとある。若し果して此の如くなりとすれば、學究に據らずして實踐を要とする淨土敎は、當時大規模なる寫經事業の官の勞を煩はすことなく、その典籍流傳は世塵を避け、專ら心靈の修養と眞理探求に精進せる、一部の願生者に依り信仰の熱情を籠めて轉寫せられ、祕かに信仰的價値ある傳書として傳持せられたものと考へられるのである。若し此の推定にして大過なしとすれば、論註も寫經事業とは緣薄く、從つて社會の表面に立ち、一般敎界人の視聽を集め欹たしめなかつたことが原因して、今日その傳來弘布の史實が明瞭を缺くことゝなつた所以であらう。

## 二

智光以後平安末期に至る間も亦論註の流布研究の史實は全く闇黑に屬し、一言にして言へば往生論の末疏としては單に智光の釋あることを知つて、鸞師の註の存することを知らざるが如き狀態であつた。僅かに此の間に於いて論註

を自己の撰述中に援引せし者は、永觀⑥（一六九三）と珍海⑦（一七五一）との二師あるのみである。而して此の論註の研究及び援用は、後世に見るが如き信仰成立の根本基調をなすものではなく、その目的は自己の彌陀信仰を強化する爲めに、先聖の金言を以て龜鏡となせる、所謂傍證的の價値のみを有するものである。若し然りとすれば、二師以前に於いて、彌陀信仰を以て社會大衆に多大の教化を及ぼせし典籍を著はし、その行履亦篤き西方願生の行者なることを以て知られたる良源・源信の兩師についても、永觀・珍海と同樣の方途を採るべきが自然なる方式と云ふべきである。然るに良源の九品往生義⑧、惠心の往生要集等⑨の中には、當然引用せなければならない處に於いても、論註に據らずして寧ろ智光の釋を出し、智光が論註の文を釋の中に引用せる文をも、智光釋曰となして何等の注意を拂ふことなく、後人をして宛も良源、源信の二師は鸞師に徒生論の註あることを知らざりしが如き感を抱かしめるのである。

以上之れを要するに、時代的に見て源信の入寂は永觀の示寂に先立つこと九十五年であつて、可成接近するにも係らず、良源、源信が之れを用ひなかつたこと、又地理的には北嶺系に於いて用ひられず南都系に於て論註が重視せられたこと、更らに宗派的の立場よりすれば天台宗に用ひられず、三論宗に於いて用ひられたこと等の諸點が見出されるのである。今此等の諸點を綜合的に考察すれば、當時日本佛教界の最高峰であり最高佛教學園とし、學徒常に雲集する叡岳に、論註の存在を見ざりしとは容易に考へられないのである。源信の寂後七十五年卽ち堀川帝の嘉保元年に、南都興福寺沙門永超の撰述せし東城傳燈錄⑩には、智光の釋と共に列擧せらるゝを以て、當時現存せしものなることは自ら明らかである。而もそれを北嶺系に於いて故らに援引せざりしことは、恐らくはその所屬宗派の相違に依る顧慮に依るものであらう。反之、南都系の西方願生者の思想及び撰述に鸞師のそれを見出すことは、何等その所屬

本宗に對し些かも顧慮すべき必要を認めなかつたのである。然る所以は之れ智光の先蹤を踏めるものであつて、三論宗と鸞師の關係は既に凝然の指摘せし處に依つて明らかなるが如くである。

## 三

珍海の示寂は仁平二年(一八一二)で宗祖の黑谷蟄居後二年卽ち二十歲の時である。宗祖の曇鸞教學を研究せられし年代及びその期間については今之れを明らかにするに由なきも、二尊院藏國寶唐畫「淨土五祖像」一幅について勅修傳[11]に示す處に據れば、俊乘房重源の入唐以前に唐末二代の高僧傳中より、曇鸞・道綽・善導・懷感・少康の五師をぬき一宗の相承を立てられたのである。[12]

重源の入宋[13]は六條天皇の仁安二年(一八二七)にて、その翌年九月歸朝せるを以て、宗祖は仁安二年卽ち三十五歲以前に、廣く支那淨土教諸師の教義傳記について深き研鑽を重ね、後日他力易行易修の大法幢を建つべき素地は培養せられ、鸞師教學についても綿密なる研學と深き思索が累ねられたことは當然である。

彼の日本淨土教各派が尊重し、根本聖典ともなす選擇集は、藤原兼實の懇請に依り、建久九年宗祖六十六歲の時撰進せられたるものなれど、その大綱は既にそれより以前に組織せられたるものにて、決して短時日の間に大成せられたるものとは考へられない。故に宗祖が選擇集の劈頭第一章段に於いて、論註に說く難易二道も、安樂集に明す聖淨二門と同意の教判となし、[14]聖淨二門を取捨して淨土一宗を建立する重要なる典據となし、且又淨土宗正依の經論中天親の往生論を選ぶには、此の時代に於ける鸞師研究の結果の然らしむるところなりと言ふも敢えて大過なからう。

淨土の法門開闡せられ、宗祖に依つて正依の論の支那淨土教註家の最高權威として、且又教相判釋の一典據として

論註が一度重視せらるゝや、論註の研究は空前の活況を呈することゝなつたのである。即ち宗祖門下及びその流れを汲む者は勿論、宗祖の教團を嫉視し其弘布を阻止せんと企圖せし者の間に於てすら、等しく共に此書に思ひを潜むることゝなつた。此の研究の目的は一は宗法興隆護法愛宗の爲めであり、他は論難破斥排濟の爲めとの二途に該括することが出來る。

宗祖に依つて昂揚せられた論註研究の、鎌倉中葉に至る迄の間の成果として、今日吾人に殘されたるものについて考察すれば、凡そ二樣に大別し得られるのである。一は純粹に註文についてその研究成果を殘せるものと、他は扶宗顯正的に註文を援引せるものとである。後者については論註研究としては異論なきに非ざるも、一面に於いては多大の關心を有し、研究を重ねし結果たることを推定するに足る一資料なりと認むる點に於いては異論ないところであらう。

純論註研究の著述としては三祖記主に「論註記」五卷を初めとして、了慧の「論註略鈔」二卷、「淨土論註拾遺鈔」三卷、良榮の「論註記見聞」五卷等がある。更らに金澤文庫には「無量壽經論註聞書」と題する書籍上卷のみを襲藏することは、我國論註研究史上に一大光彩を添へるものであり、宗學上の一大幸慶と云ふべきである。作者は不明なるも、建長八年三月十九日良聖に依り筆寫せられたるもので、大和綴見返し共六十枚である。更らに西山淨音には「往生論註刪補鈔」ありて、實に鎌倉中葉に至り論註は俄然淨土教派の重要宗典となり、その研究は燦然たる光輝を放つに至つたのである。此の研究勃興の原因としては、宗祖の支那五祖の立祖と立教開宗の根本要素たる判教の典據となれること、及び鸞師が捨聖歸淨の大先達[15]として仰がれたる點等を擧げることが出來るであらう。

次ぎに扶宗顯正的援引をなせるものは、更に正流と異流とに分たれる。前者の中には宗祖の選擇集を初め、二祖の「徹選擇」、「西宗要」、「淨土宗名目問答」、三祖の「傳通記」、「觀經疏略鈔」、「東宗要」、「決疑鈔」、良榮の「淨土宗要見聞」等がある。次ぎに異流の中には西山證空の「密要決」、眞宗親鸞の「教行信證」等を擧げることが出來る。かくの如く論註研究が隆昌を來せしことは、獨り本書の眞價が不朽なるが爲めのみではなく、機教相應の淨土門の獨立に依ることゝ、宗祖の熱烈なる研究と鸞師鑽仰とが自然弟子及びその末流に反映せる結果であり、率ひては淨土宗學研究の基礎學となるに至つたのである。

## 四

最後に前節に於て述べるべくして述べなかつた、未傳稀覯の無量壽經論註聞書卷上について一言觸れることゝせん本書の體裁は大和綴每紙十三、四行であり、各行は十八字乃至廿一字詰である。內題の下に金澤稱名寺の墨書あり、表紙見返しには

建長八年乙卯三月十一日雨大霰也先例難有

と書寫中に於ける天變を記してゐる、表紙左肩に曇鸞註聞書上とあり右下に良聖花押の自署あつて、筆者が所持者なることを傳へてゐる。

本書の記述の體裁は「沙門曇鸞註解事」、「謹案龍樹菩薩十住毗婆娑等」、「五濁之世於無佛時事」等と標して、それにつき簡潔なる問答體を以て全篇を終始してゐる。

今本書について考ふべき點は、先づ初めに撰者である。若し撰者を推定し得れば、撰者の類書との關係及びその製

作の前後、筆者良聖等についての問題等が考へられなければならない。此等の諸問題の解決に當り手引となるものは、金澤文庫に傳ふる良聖手澤古鈔本の奥書である。本書は奥書に依れば良聖廿三歳の時下總國匝瑳莊米倉郷に於て、建長八年三月十九日に書終れるものである。その前年には「觀經疏聞書」を書寫してゐる、即ち「玄義分聞書」の奥に

建長七年乙卯五月十六日、於下總國嗟匝御莊、福岡郷被談、能化然阿彌陀佛五十七、良聖時年二十二歳也

と云ひ、「定善義聞書」の奥には

建長七年乙卯二月六日讀了、中間日數三十六日除闕日八日之定也、同聞衆五十人、能化然阿彌陀佛生年五十七也、抑此定善義者建長六年十二月二十日被談始(下略)云云

とあつて、之等から推せば、共に能化然阿彌陀佛の講義を同聞衆中の一人たる良聖の筆錄たることを知り得るのである。その他良聖の手澤本には「往生禮讃聞書」と「群疑論見聞」七卷とあり、「群疑論見聞」の奥書には

建長八年丙辰八月十六日、於常陸國東條莊小野郷書寫之了、執筆良聖年二十三歳也、聖忍　花押

とあり、「往生禮讃聞書」には

康元二年正月十四日、於上總國伊南關郷常樂寺書了、但此借他人本以書之、筆師良聖時年廿四歳、聖忍房　花押

とあつて、共に聞書と題名を附する點より見るも同一人の講述であり、其れを同一人の良聖が筆受せるものなることは明白である。されば「觀經疏聞書」に書せる能化然阿彌陀佛の名は上掲の書目全般に通ずる文字と見ることを得られるであらう。[16]

若し以上に述べたることが事實に大差なしとすれば、「無量壽經論註記」五卷とは如何なる關係を有するものであらうか。註記は既に今岡達音氏が指摘せる如く、[17]第一草稿は弘長三年、第二改定は文永二年、第三改定は文永九年、第

四改定は建治元年、第五改定は弘安九年にと、數度の改定を經たものであつて、今の此の見聞とは如何なる關係にあるかと云ふに、年代上本書は註記の第一草稿の時よりは七年、極再治本の成れる時よりは三十一年の昔に書寫せられたるものであつて、徒弟教育の目的を以て弟子等の爲めに講述せるものの要點を錄せるもので、所謂根底をなせるものと云ふべきである。何んとなれば數度の講述は他日述作の豫備的性格を帶びるものであるからである。されど此れを以て直ちに草稿的遺品と見ることは出來ないのであつて、他に之れと同一地位を占め且つ記主の筆を染めし草稿的古鈔本の存せしことは、西師の註記見聞に「御抄」、「鎌倉御抄」と表示せるものが、今の文と一致せないことに依つても知られる。

註記の草本となれるものには非るも、その根底をなせるものなることは、內容の檢討に依つて窺ひ得られるのである、卽ち聞書の開卷劈頭の文を比較するに

（聞　書）

問論注俱廣□□本末別見如何　答孝經云朱以發經墨以起傳文議曰經傳不相辨故朱墨爲別後漢以來注事者皆以廣細爲異故不改朱墨文

（註　記）

并註卷上卷下者鸞師註解釋偈頌爲上釋上行爲下此文上下往往擧論作釋本末相雜論註難辨蓋是存古體朱墨爲別註孝經序云朱以發經墨以起傳已上議曰經傳不相分辨故朱墨爲別後漢以來註書者皆以麤細爲異故不改朱墨已上

と具略の差はあれど中心は同一であり、又五濁之世於無佛時を釋するに當り、世と時との別を說ける如きも

（聞　書）　—　（註　記）

問云世云時有何別歟總無別但今文世者總指濁世時者別指無佛時歟文意可思之　有云世者非時代世世間云事歟意云國土事也

問世時何別答總而言之世時無別但今文意世通有佛無佛時局無佛思而可見有云世者五濁世界非時代世

とあつて、此の他兩者の內容比較をなす事は、繁に過ぎるを以て單に一例を擧げたのみである。要するに兩者の關係は殆んどその說明釋義の中心、換言すればその結論的部面に於いては一致することを知るのである。

以上の諸點を綜合的に考察し、聞書の作者及び性格について一言すれば、本書はその筆者、書名及び內容上能化記主然阿の所說を些も私見を雜ゆることなく記せるものである。然れば記主の講說に列したる良聖が結集筆錄せる記錄的書籍なるか、又は他の高足の錄せるものを轉寫せるものなるか、將又記主が講筵に臨むに先立ち、備忘的に中心問題についての解義を錄せしものを借覽し、書寫せるものなるかの三點が注意に登るのである。

此等の點について結論的に云へば筆者良聖は師の講席に列して學を受け、その要を錄したものであらう。如此想像をなし得らるゝ根據は、前揭の「往生禮讚聞書」の奧書中に「但此借他人本以書之」とあれば、靑年良聖は同聞衆と共に熱意を含めて師說を受け、その要を記したものが聞書と稱せられる所以である。之れに對し記主は別に草を起し述作せるものが、「御抄」「鎌倉御抄」と稱せられるものであり、數度の改定を經て世に出せるものが現今傳はる「註記」ではなからうか。大方諸賢の指敎を仰ぐ次第である。

註①智光の論疏は今散逸し傳はらざるも、その存在は足利時代に迄及び、酉譽聖聰は小經直談要註記に引用す。此書は淨土敎諸師に用ひられ、諸處に散見するものを綜合すれば凡その思想信念は推知せられ、此書の撰述に當り特に論註を重視せしことは、

往生要集に智光の疏の文として引用せし文(淨全一五、一二一)が論註上卷(淨全一、二三一)の文と同一なることに依つて知られる。

②日本往生極樂記等の諸傳に載する夢想感見の智光曼荼羅の製作後、師は之を極樂坊に安置し、淨土の莊嚴を觀ぜしことは、曇鸞の勸むる五念門中の觀察門の實修であると云ふべきである。

③日本書紀二三卷、舒明天皇十二年(一三〇〇)五月、日本書紀二五、孝德天皇白雉三年四月の兩度あり。

④善導の寂年は永隆二年(西紀六八一)一說には龍朔二年(西紀六六一)と云ふ。されば天平勝寶を遡ること七十年乃至九十年に及ぶ。

⑤岩波講座日本歷史「佛敎の初期文化」(石田茂作)八七頁、五二頁參照

⑥往生拾因の第十因に論註上卷の一念を釋する文を引き「余遇二此注一雖レ喜不レ傳二口授一是恨然有人云向二於西方一折レ指念佛一心不亂自知二頭數一行レ之可レ知是途聽耳」と(淨全一五、三九一)

⑦決定往生集卷下

⑧臨終の十念と五逆十惡の繫業との輕重を校量するに論註を用ひず、天台十疑論の第八十念往生疑中の在心在緣在決定の說明を用ゆ(淨全一五、三〇)。之れ自己の宗派の祖師の文に依れるものならんも、曇鸞に同一主張のあることを指示せざるは不可なり。

⑨大文第十に有師云とて鸞師の略論安樂淨土義を引き乍ら、大文第七には往生論智光疏釋此文云とし註①に指摘せる如く論註の文を引く。

⑩大正藏五五・二五六に

無量壽經論偈註解一卷 曇鸞

同　論釋 日本智光述

⑪勅修傳(淨全一六、七二)

⑫選擇集第一章段に淨土宗の師資相承血脈を明して支那の五祖を立て、又類聚淨土五祖傳の編纂あり。

⑬元亨釋書一四　本朝高僧傳三、東國高僧傳九

⑭選擇集（淨全七・五）

⑮選擇集（淨全七・五）

⑯今岡教授還曆記念論文集「淨土宗學上の未傳稀覯の鎌倉古鈔本」（塚本善隆氏）參照

⑰淨全二一（四〇）